

岡村産科婦人科：無痛分娩に関する説明書

分娩に対する不安感や恐怖感、陣痛に伴う痛み(産痛)がかえって分娩の進行を遅らせたり、場合によってはパニック状態となってあなたと赤ちゃんに悪影響を及ぼすことがあります。したがって、分娩時の産痛を適切な方法で取り除くことは、安全な分娩を行うために有用な方法と考えられます。

1. 無痛分娩とは？

硬膜外麻酔という方法で、陣痛の痛み(産痛)をとる(和らげる)ことをいいます。

ただし、痛みは非常に主観的なものであり、痛みの感じ方には個人差があります。痛みを全くなくすということではなく、陣痛を十分コントロールできる程度まで鎮痛することが目的です。

2. 利点は？

●体力の消耗を少なくすることができます。

●分娩に対する恐怖感がなくなり、リラックスすることが期待できます。

3. 硬膜外麻酔の実際

●無痛分娩の開始前から、絶食とします。

嘔吐した吐物の誤嚥により、重篤な肺炎となることがありえるためです。

●少量の飲水は可能ですが、点滴からも水分を補います。

●腰の少し上のあたりから注射をして、硬膜外腔へ細いカテーテルを留置します。

●カテーテルから局所麻酔薬を注入します。効果に応じて、1～2時間毎に注入を繰り返したり、持続的に注入したりします。

●胎児心拍を連続モニタリングし、血圧・心拍数・呼吸数定期的に測定します。

●麻酔のかかる部分は、おへその少し上から外陰部までなので、意識はふつうにあります。当然、会話もできますし、赤ちゃんの産声も、娩出の様子もわかります。

4. 起こりうる問題点

●分娩が遅延し、陣痛促進剤の使用や吸引・鉗子分娩が増える傾向があります(帝王切開率は不変)。また、無痛分娩自体は十分に安全な医療として確立されていますが、医療行為である以上麻酔に関連した合併症が起こることがあります。

●血圧が下がったり、発熱することがあります。

●導入直後に胎児一過性徐脈が起こることがあります。

●下半身に力が入りにくくなったり、尿意を感じにくくなるがあります。

●分娩後に頭痛を起こす可能性が1%程度あります。

●稀なことですが、カテーテルが血管内に迷入した場合に局所麻酔薬中毒、くも膜下に迷入した場合に全脊髄くも膜麻酔(広範囲な麻酔効果)となることがあります。

5. 分娩中の妊婦さまや赤ちゃんの状態、急に分娩が進行した場合など、必ずしもご希望に添えないことがあります。またこの麻酔法は、腰から少し上の部分への穿刺という処置が必要であるため、脊椎に解剖学的異常がある場合、血液凝固障害がある場合、穿刺部付近の皮膚に感染がある場合、どうしても針が刺入できない場合、穿刺体位を取ることに協力してもらえない場合等は、施行できませんのでご了承ください。

6. 無痛分娩の導入は可能な限り臨機応変に対応いたしますが、非常勤医師が分娩担当の際は対応できない場合がございます。2018年の「無痛分娩の安全な提供体制の構築に関する提言」において麻酔担当医の要件が求められており、ご理解たまわりたく存じます。